2026/10/16

TOKにおけるコミュニケーションスキルの育成

１．TOKとコミュニケーションスキル

TOKの授業では、毎回「知識に関する問い」を扱います。「知識に関する問い」は「正解」が存在しないオープンで「曖昧な」問いです。例えば「知識、信念、意見という３つの概念を区別するために、私たちはどのような規準を使うことができるか。」「歴史について書く際に、『残虐行為』や『英雄』などの言葉を使うべきか。それとも、価値判断は避けるべきか。」といった問いです。

生徒は「知識に関する問い」に対して自分の主張を展開するだけでなく、問いに正対し、多様な定義・含意・前提の存在を自覚し、問い（抽象）と具体例や事物（具体）の往還を通じて他者と対話することが求められます。評価課題ではそれに加え、明確で一貫性のある議論、緊張感のある議論をすることも求められます。これらの学習のプロセスには、「情報・アイディアの交換」や「議論の可視化」「省察的対話」「批判的リテラシー」といったコミュニケーションスキルの重要な要素が含まれています。

２．TOKと生徒のコミュニケーションスキルの成長（20期生の振り返りシートをもとに）

（１）プレゼン＋ディスカッションを通じた成長

①直感や漠然とした思考を他者と共有するための「言語化力」

Ａさんは「失敗と知識の生産」に係る問いを扱ったときに、「芸術に失敗はないのではないか」という直感にとどまり論理的な説明が難しかったものの、ディスカッションで「失敗（破損）そのものが評価される芸術が存在する」という他者の視点を得たことで、自身の意見を言語化・再確認できたと振り返っています。また、Ｂさんも議論を通して「何をもって失敗とするか」の定義を見直し、自らの解釈を言葉として整理し直すことができたと語っています。

②対立する「ものの見方」を受容・調整する対話力

ＣさんやＤさんは、芸術作品（ミキサーに金魚を入れた展示）における製作者と動物愛護団体の対立や、芸術家と鑑賞者という異なる立場から生まれる同じ作品を共有する難しさ、歴史（原爆投下に対する日本とアメリカの捉え方の差）を挙げ、個人の価値観や立場によって異なる解釈が生まれる構造を授業での対話を通じて理解したことを振り返っています。

③TOK12 の概念を用いた「深い理解と伝達力」

TOK には 12 の概念（エビデンス、価値観、正当化、権力、解釈、責任など）があります。自分たちの主張を説得力をもって発信する力が養成されています。Ｅさんは振り返りの中で「エビデンス」「解釈」「正当化」という概念のレンズを通して歴史における単一の史料による解釈のリスクや、自然科学・数学における論理的根拠と「確実性」の関係を抽象化して説明することができていました。概念を用いた振り返りは理解をさらに定着させるとともに、簡潔に他者に伝達する力の伸長も示しています。

④フィードバックを受容し、修正する「自己省察力」

教員や同級生からのフィードバックを冷静かつ客観的に受け止め、自分の言葉選びや論理構成を振り返って修正する高度なメタ発信力が育みます。Ｆさんは、プレゼン後に教員から「具体例の主語を『歴史』と一般化せず『歴史家』という専門家にする」という一般的な指摘を受けたことを振り返り、「誰が知識を生産しているのか（主体の明確化）」を意識したコミュニケーションが「私たちはどのようにして知るのか」というＴＯＫの中核的な問いに答えるうえで重要であることに気付き、今後のエッセイや議論で修正していこうとする姿勢が見られました。

（２）ディベート＋ディスカッションを通じた「論理的発信」と「前提検証力」の育成

TOK の選択テーマ（『知識と土着の社会』）におけるディベート活動では、勝ち負けを競う弁論ではなく、対立する二つの立場（伝統知の保護×近代的合理性の優先、口承・身体知× デジタルアーカイブ、など）の双方の主張の構造を分解し、再構築するためのディベートとディスカッションを実施しました。生徒の振り返りワークシートから、この活動を通じて以下のようなコミュニケーションスキルの意識づけが確認されています。

①相手の主張の前提を可視化するための質問力と傾聴力

相手チームに「相手の立論の前提を浮かび上がらせる質問」 や「事前に反証を予測した効果的な質問」を投げかける練習を通じて、相手の価値観や論理の穴（例：科学的データのみを絶対視する前提や、実用性のみを重視する視点）を丁寧に聞き取る姿勢を意識づけられるようになったという振り返りが見られます。

②自分の主張を批判的に捉える「自己省察力」

相手からの反論やオーディエンスからの評価に基づいて「事物が問いから離れてしまった」「あえて中立をとるのではなく反対・賛成の極に立つことで、論理を練り上げることが重要だと気付いた」「事前に反論を予測して予習してきたことで議論の穴を突くことができた」 など、自らの主張を批判的に捉え、次の発話や表現へフィードバックを反映させようとしています。

③「定義」を明確にし、ズレを防ぐ言語精緻化能力

ディベートの過程で、テーマや言葉の定義があいまいだと議論がかみ合わなくなる体験を通じ、言葉の定義や問いの焦点を正確に言語化・共有するスキルが身についたと考察されます。生徒たちは「信頼性（客観的な正しさ vs 実用的な役立ち）」や「文化の盗用・倫理的責任の

範囲」「知識そのものと獲得・共有ツールの違い」などの定義の違いが認識のズレを生むことを発見しました。この気づきから、「あらかじめ問いのキーとなる言葉を定義して論を展開するる」「知識の獲得と共有それぞれの正確性を明確に分ける」といった、議論の焦点を定める言語表現力を磨こうとしています。